

実用新案公報

⑨公告 昭和48年(1973)3月26日

(全2頁)

1

⑩ガラス繊維強化プラスチックスパネルの接合構体

⑪実願 昭44-52086
⑫出願 昭44(1969)6月5日
⑬考案者 村山徹
川口市領家町5000の2東京芝浦電気株式会社川口工場内
⑭出願人 東京芝浦電気株式会社
川崎市幸区堀川町72
⑮代理人 弁理士 鈴江武彦 外4名

図面の簡単な説明

第1図はガラス繊維強化プラスチックスパネル接合構体で構成したプレハブ式建造物の一例を示す正面図、第2図は従来のガラス繊維強化プラスチックスパネルの接合構体を示す断面図、第3図は本考案の一実施例の接合構体を示す断面図、第4図は同正面図、第5図は接合部の広大断面図である。

考案の詳細な説明

本考案はプレハブ式の建造物の外壁などとして用いるガラス繊維強化プラスチックスパネルの接合構体に関する。

例えば第1図に示すようなドーム型のプレハブ式建造物を、ガラス繊維強化プラスチックスパネルによつて建造する場合、従来は第2図に示すようにパネル1の端縁にフランジ2を形成して、隣接するパネル1のフランジ2を互に接合固定している。しかし外観上接合部を外面に出したくないので、内面にフランジを形成する場合が多いが、このようにすると、フランジ部の形成が困難となり、パネルを形成する型を割り型にしたり、フランジとパネルとを別個に成型し、これらを接着することが必要となり、フランジの付け根部分は応力が集中するために補強が必要となつてコスト高になる。また剛体同志の接合であるため、パネル間隔の調整が困難で、雨水などが接合部から侵入

するおそれがある。

本考案は樋の底部の外側面に沿つてひれ状部を突出させた特殊な構成の弾性材質からなる継手を用いてパネルを連結することにより、前述した欠点を除去したパネル接合構体を提供しようとするものである。

次に本考案の一実施例につき第3図以下の図面を参照して詳述する。第3図以下の図面中11は弾性材質からなる継手で、半円弧状の溝12を有する樋13の底部を横方向に延長して一対のひれ状部14を形成し、これらの外面には剛性材質板15が裏打ちされ、ひれ状部14及び剛性材質板15を貫通させてボルト孔16を穿設する。また第3図以下の図中17はガラス繊維強化プラスチックスパネルで、その端縁部には複数個のめねじインサート18が埋設されて一体に成型してあるそして前記パネル17の端縁部を前記樋13の外側面に沿つて密着当接し、前記めねじインサート18にボルト孔16を貫通させたボルト19を締付けて隣接するパネル17を継手を介して接合するものである。

従つて継手が弾性材質からなる上に樋状に形成されているので、パネルと継手との間に隙間ができ難く、雨水などは樋の溝を流下することと相まって雨水などが侵入し難く、とくに第1図に示すドーム型建造物のように曲面状にパネルを接合する場合に有効である。とくに前記樋の溝の深さを深くしパネルの厚さに等しいかそれ以上にすればパネル間隔の調整がこの部分の変形によつて容易に行うことができる。パネルはフランジを形成することなく平板状のものでよいから廉価に提供できる効果がある。

なお本考案において、上下左右にパネルを連結する場合には第4図に示すように樋の溝が上下左右に連続するように溝の両側方に突出した部分を切除すると、漏水防止が一層良好になされる。また本考案の継手に用いる弾性材質としては、天然ゴム、シリコンゴム、弗素ゴムなどのゴムやエチ

2

10

15

20

25

30

3

レンビニールアセテート、アイオノマー等のエラストマーを挙げることができる。

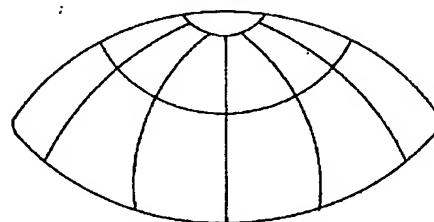
⑦実用新案登録請求の範囲

弾性材質からなる樋の底部を横方向に延長付設した一対のひれ状部の外面にそれぞれ剛性材質の板を裏打ちして継手を形成し、継手の樋の外側面

4

に沿つてガラス繊維強化プラスチックスパネルの端縁を密着当接し、パネルの端縁に埋設した複数個のめねじインサートと継手の剛性材質板を含めてひれ状部に穿つた複数個のボルト孔にボルトを挿通螺合して締付けてなることを特徴とするガラス繊維強化プラスチックスパネルの接合構体。

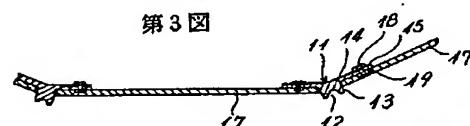
第1図



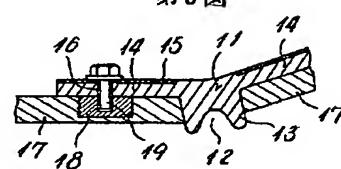
第2図



第3図



第5図



第4図

